

アーサー・コナン・ドイル作
伊豆野 良江訳

クランバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

第六章 新たな決意

「部屋にもどるんだ！」將軍はつかつかと二人の間に割り込み、家の方を指差すとしやがれ声で言った。

ガブリエルはおびえた目でわたしを見やり、抜け穴から家に戻った。それを見届けた後で、將軍はわたしの方を向き直った。その形相たるやすさまじく、思わずあとずさりして、櫛のステッキを持つ手に力を入れたほどだった。

「き、きさまは…」そう言つと、怒りで息がつまったように、のどをかきむしりながらまくしたてた。「人の私生活に首を突っ込みおつて！この塀を建てたのは、蛆虫どもを集めるためだと思つてるのか？もう少して死ぬところだったんだぞ！命が惜しかったらここに近づかんことだな。ほら、これだ！」そう言つて、懐からずっしりした銃を取り出した。「あの穴から一步でも庭に入っていたら、ただじゃすまなかつたぞ。やくざ者は絶対許さん。そういう連中は痛い目にあわせてやる。白人だろうが、黒人だろうがな」

「わたしは何も悪気があつて来たわけじゃありませんよ。それなのになぜこんな扱いを受けなきゃならないのかわかりません。そんなに手が震えていたら、誤つて撃つかもしれない。お願いですから、銃口を下に向けてもらえませんか。そうでないと、こちらもステッキで正当防衛をするしかありませんよ」

「いつたいここに何しに来たんだ」將軍はやや落ち着きを取り戻した様子で、銃を懐にしまいながら言った。「静かに暮らしたいのに、なぜ覗き見るんだ。君には関係ないだろう。それに娘のことはどうなんだ。どうして娘を知るようになった？娘から何を聞き出そうというんだ？ここに来たのは偶然と言つつもりじゃあるまいね」

「ええ、偶然ではありません。何回か娘さんにお会いするうちに、その人柄に惹かれるようになりました。そしてわたしたちは婚約したんです。きょうも、どうしても会いたくてやって来ました」わたしは、しり込みせずそう答えた。

怒り狂うと思いきや、意外にも將軍はビューと口笛を吹いただけだった。そして横木

に寄りかかって、ふっと笑いを漏らした。

「イギリスのテリアは虫を嗅ぎ出すのが好きだね。インドに連れて行くと、ジャングルに飛び込んでいって、すぐにクンクンやりだす。ところが、虫のかわりに毒蛇がいるとわかると、二度と嗅ぎまわることとはしなくなる。君も気をつけんと、そういう目に会っぞ」

「まさかお嬢さんが、毒蛇だというんじゃないでしょうね？」わたしは怒りで顔がほてるのがわかった。

「いや、ガブリエルのことじゃない」将軍はわたしの気持ちには無頓着に言った。「わしの家のことだ。結婚を勧められるような家じゃないんだ。しかし、そんな大事な話をどうしてわしに黙っていたんだね？」

「仲を引き裂かれるんじゃないかと思ったんです」この際、正直に話したほうがいいだろうと思って、わたしは言った。「でも、あなたを誤解していたかもいけません。どうか結論をお急ぎにならず、わたしたちが幸せになるかならないかは、あなたのお心ひとつにかお急ぎにならないでください。」

かっているのです。たとえ、二人を引き離すことができたとしても、魂は永遠に一つですから」

「ああ、君は何にもわかっておらん」と将軍は答えたが、そんなにとげとげしい口調ではなかった。「ヘザストーン家の人間と君の間には、埋められない溝があるんだよ」

怒りはすっかりおさまった様子だったが、人を小馬鹿にしてそれをおもしろがっているように見える。今度はこつちがむつとする番だった。

「本当にそんなに深い溝があるんでしょうか。こんな片田舎に住んでいますが、百姓の家系ではありません。父方は貴族の出ですし、母は由緒あるバカン家の人間なんです。あなたのおっしゃるほど不釣り合いだとは思えません」

「君は誤解しているようだ、問題があるのはこつちなんだ。わけあって、娘のガブリエルは生涯結婚できないのだよ。娘と結婚しても、君にはなんの得にもならない」

「得かどうか決めるのは、わたしです。わたしは、どんなことがあってもお嬢さんと結婚するつもりです。この結婚でどんな危険に直面することになるのが、それに立ち向かう覚悟でいますから、どうかお認めください」

「これは、勇ましいことだ！」将軍は熱くなっているわたしに苦笑した。「どんな危険が知らんうちは何とでも言えるもんだ」

「いったいどんな危険なんですか」わたしは、勢い込んで言った。「どんな危険も私たちを引き離すことはできません。どうかわたしにお話しになって、確かめてください」「いや、いや、それはできん相談だ」将軍はため息をつき、考えに沈みながら独り言を言った。「勇気もありそうだし、体格もいい。こりゃ助けになるかもしれんぞ」そして、わたしがいるのも忘れたように、「あらぬほつを見つめたまままぶつぶつ言ったあと、こちらに向き直った。」

「ウエストさん、さきほどはつい無礼なことを言って、申し訳なかった。これでお詫びするのは二度目になるが、もうこんなことはせんつもりだ。世間と接触を断とうとするあまり、あんな態度を取ってしまった。だが、そうするだけのわけがあつてね、いつ襲われてもおかしくないと覚悟しておる。もしそういつことになったら、わしの力になつてくれんかね？」

「もちろんですとも」

「それじゃ、『至急』とか『クルンバー』とかの伝言を受け取ったら、助けに来てくれるかね？」

「誓つて駆けつけます。でも、それほど心配されている危険つて、いったい何ですか？」

「君に話したつて何にも変わらんよ。それに、たとえ話したとしても、信じてはくれまい。やあ、うっかり話し込んでしまった。それじゃ、失礼しますぞ。何かの際には当てにしているのを忘れんよう」

「ああ、もう一つお話しておきたいのですが」とわたしは、もう歩き出そうとしている將軍にあわてて言った。「さっきのことで、娘さんを責めないでいただきたいんです。黙っていたのは、わたしのせいなんですから」

「わかった」將軍は冷ややかで謎めいた笑いを浮かべた。「わしはこれでも家族には優しいのだよ。しかし、結婚のことは友人として忠告するが、忘れたほうがいい。それが無理なら、当分見合わせることだ。いつ何が起つてもおかしくないからな。それじゃ、また」

そう言つと、さっさと歩き出し、うつそつと茂つた木立の中に見えなくなつてしまつた。

出合いがしらの銃を突きつけておきながら、別れ際には、将来義理の息子になる可能性もないわけではないと言つ。なんとも奇妙な話で、がっかりしたらいいのか、有頂天になつたらいいのかさっぱりわからなかつた。

これによつて娘への監視はさらに厳しくなり、今までのようには自由に会えなくなりそうだったが、一方で、日を改めて求婚すれば望みがありそうな気もする。帰る道々、いろいろ考えた末、事態は好転したと思つことにした。

しかし、説明できないといふこの謎めいた危険が、クルンバー館をいつ襲つとも限らないのだ。いくら知恵を絞つてみても、解決する方法は思い浮かばなかつた。

ただ一つだけ、それを解く鍵になりそうなことがあつた。父も息子もそれぞれ、どんな危険か話したとしても、理解してもらえないだろうと言つていたことだ。そんな不可思議な危険とは、いったいどんなものなのだろう。

その晩、わたしは眠る前に暗闇に手を挙げて、それが人であるうが魔物であるうが、わたしの愛した女性のためなら恐れはしないと誓つたのだつた。